

# エンカウンター（ENCOUNTER）

第 122 号

平成 24 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助・導源（1898-1980）

明治 31（1898）年、奈良県に生まれる。東京帝国大学法学部卒。安田信託銀行を経て、49 歳の時、キリスト教伝道者に転身。以後、日本基督教団高円寺東教会牧師として、聖書の講解説教を 31 年間続けた。著書に『ローマ人への手紙 講解説教』（キリスト新聞社）、『天国の外交官』（石館基編）などがある。内村鑑三及び恵心僧都の信仰態度に学び、自らのキリスト教を「恵心流キリスト教」と呼んだ。昭和 55（1980）年、満 81 歳で昇天した。

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（1）

## 第 1 講 ロマ書の意義

### 私と内村鑑三先生

ロマ書についてお話しするとなりますと、私は、どうしても内村先生について語らざるを得ません。いつもの繰り返しになりますが、私と内村鑑三先生との関係につきまして、少し申し上げたいと存じます。

内村先生は、今から 50 年前、大正 10 年（1921）1 月 16 日から、東京大手町にある私立衛生会館において、ロマ書の講義を始められました。それから、約 2 カ年にわたり、ロマ書を 60 回に分けて講義

なさいました。私は、幸いにも高等学校の2年生の初め、大正7年の秋から、内村先生のお話を聞き始めましたから、大正12年の3月に大学を卒業するまで、満4年半、足掛け6年間、毎日曜日に内村先生の聖書講義を聞いたこととなります。続いて、大正12年の9月から大正14年の3月までの3年間は、毎日曜日は出席できませんでしたが、できるだけ先生の講義を聞くように致しました。特に、大正10,11年の2年間は、丁度私が大学生でしたから、先生のロマ書講義を全部聴くことができました。

内村先生は、大正8年の5月から4年間、59歳から63歳まで、私立衛生会館で講義をなさったわけですが、そのうちの2年間はロマ書の講義に当てられた。先生ご自身が仰せになっている通り、この時期は先生の最高潮の時期でありました。先生は、「自分が最もよく研究した書はロマ書で、これが自分の信仰である」と言っておられた。そうですから、内村鑑三全集に出てくる『羅馬書の研究』の序文を読んでみましても、いかに内村先生がロマ書に傾倒しておられたかが分かります。「この書はあたかも自分の信仰を語っているかのようである。60回の講義を100回、200回にしたとしても、話の種は尽きない。60回の講義を終えた時には本当に惜別の情に堪えなかった」と述べておられます。こと程左様に、内村先生はロマ書に傾倒しておられた。私はそのロマ書の講義を全部聞くことができました。

## 内村先生のロマ書 3 章 21 節の講義の思い出

先生のロマ書の講義を聞く 3 年前、大正 7 年、第一高等学校の 1 年生の終り頃に、小石川の白山教会において、中田重治先生から「イエス・キリストの血すべての罪より我を潔む」という福音を聴きました。私は、この時初めて福音に触れ、それで洗礼を受けた。しかし、この福音が、私の心にガチッと入ったと言いますか、私の理性を本当に満足させたのは、大正 10 年 5 月 15 日、内村先生のロマ書 3 章 21 節の講義の時であります。その日のロマ書 3 章 21 節の講義において、先生が「神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者にあかしされて、現わされた」という聖句の「律法とは別に」という箇所を、「律法、道徳とは無関係に」と説明された。その先生の「律法、道徳とは無関係に神の義が人類に臨んだ」という言葉が、私の心にパッと入って来ました。イエス・キリストの十字架による贖いの意義が、はっきりと入って来ました。すなわち、「律法、道徳とは無関係に神の方から私に下さった」ということが分かった。人間側の心の状態とか、行ないの状態とか、そういう人間側の状態とは無関係に、神の義が提供されている、これが福音の意義です。このことが、その時に分かりました。これが私の福音理解の根底になっています。それから 50 年が経ちまして、私はキリスト教というものをさらに少しく理解することができるようになりました。内村先生は 69 歳でお亡くなりになりましたが、私は今年、幸いにも満 72 歳を迎えます。そして、また再びロマ書の講義をできますことを誠に幸いと存じております。

## ロマ書の意義

ロマ書の意義、すなわち、ロマ書とはどんな書であるかと言えば、「キリスト教の真理、すなわち、福音の真理を、最も明瞭に説明した書である」ということでもあります。これに勝る書はありません。旧約、新約聖書を通じてキリスト教の真理であるこの福音を、ロマ書ほど明瞭に説明してある書はほかにありません。これは、世界の学者の一致した見解であります。本日は、ロマ書が最も明瞭に説明して入る福音の性質、福音の内容、その福音を受けて自分のものとする方法、最後に、この福音が人類に及ぼした影響と、4つの点について、簡単に申し上げたいと思います。これがロマ書の意義を明らかにする所以であると思うからであります。

## (1) 福音の性質

福音の性質というものは、人智を超越(transcend)しています。別の言葉で言えば、人間以上のものであります。そうですから、人間の理性をもってしては、これを明らかにすることはできない。福音はそういう性質を持っています。

パウロはロマ書において、たびたび「霊」と「肉」という言葉を使います。「肉」と言えば人間のことですから、この「肉」以上の者、人間以上のものが福音であります。ここに、福音の難しい理由があります。すなわち、人間の研究と努力をもってしては明らかにできない。福音は、そういう性質を持っています。これをもう少しわかり易く言うならば、いつも言う通り、福音というものは外国語のようなものです。仮に人間の努力とか知恵というものを日本語とするならば、福音は英語のようなものです。そういう性質を持っている。これは大事なことです。しっかりと聴いておいて下さい。私は、福音を勉強し始めてから50年が経って、始めてこれが分かりました。どんなに日本語に練達な人であっても、英語を理解することはできない。それは不可能です。It's impossible! 聡明な人がキリスト教を馬鹿にするのは、ここに原因があります。英語の分からない日本人が英語を聞いても何が何だか分からないでしょう。外国語に興味のない人間が外国語を聞くこと程、ばかばかしいことはありません。この世のことについて聡明な人程、福音を馬鹿にするのはこのためです。

福音の性質については、以上にとどめて置きます。

## (2)福音の内容

福音の内容とはどういうものか。福音の内容を一言で言えば、「神のひとり子、イエスが、十字架にかかって、我々の罪悪、罪咎、汚れ、不義、すべての悪いところを贖って、赦し、帳消しにして、キリストの持ち給う永遠不滅の生命を我々に与えて下さった」ということであります。これが福音の内容であります。

この「永遠不滅の生命」について、パウロは、ロマ書においては「神によって義とせられる」、「栄化せられる」と、「神の義」と「栄化」という言葉を使いました。またヨハネは「限りなき生命」という言葉を使いました。これらは皆同じ意味であります。私は、このヨハネの「永遠の生命」、「限りなき生命」という方が分かり易くてよいと思います。この「永遠の生命」というものは、古今東西を通じて人類の理想、憧れであります。仏教では、人間が仏になることを目的としています。智慧無量、生命無量、慈悲無量、こういう存在を仏と言いますが、東洋人はこういう理想を求めて来た。ですから、「限りなき命」と言った方が仏教の人にもよく分かります。これは、古今東西を問わず、人類の希望、願望です。かつて、塚本虎二先生は、「人はなぜ死ぬのが厭なのかと言え、人間はこの永遠の生命を受ける道があることを、無言のうちに教えられているからである」と言われました。私はこれは適当なる言葉だと思えます。人間が死にたくないのはそういう希望があるからです。この「永遠不滅の生命」を神がイエス・キリストを通して下さったというのが福音の内容です。「神はその一人子を賜ったほどに、この世を愛して下さった」(ヨハネ伝3章16節)とありますが、この「賜った」は完了形です。それを人間側が受けるか、受けないかということだけが残っているだけです。神の方では、終わっている。イエスは、十字架上で「終わった」と言われた。英語でいうならば、「finish」あるいは「completed」です。人間側から、それに何かを付け加える必要はありません！よろしいですか。これが福音の内容です。

### (3) 福音を自分のものとする方法

それでは、この福音の内容を自分のものにするにはどうしたらよいか。これは、福音の性質と関連しています。それを考えるには、福音の性質から考えてみれば宜しい。福音は、我々の力を超えています。我々の力では、それを自分のものとすることはできない。我々の力、「我々の」と付くものでは、それを自分のものとすることはできません。では、どうすればよいか。そうして下さる神の力を、「信じる」ほか仕方がない。「信じて行なう」、「信じて真似をする」ほか、方法はありません。これは、語学の勉強とよく似ています。英語の勉強では、英米人の発音を真似するしか方法はありません。「th」の発音であれば、舌の上下を前歯で軽くはさんで「ス」と発音しなければ駄目です。日本語には元来そんな発音はありませんから、何回も真似をする必要がある。このように、新しい真理を発見するには、信じて真似をする以外に手はない。この福音の内容を信じて、真似をするのです。

ヨハネ伝 3 章 14, 15 節には、「モーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じるものがすべて永遠の生命を得るためである」と書いてあります。ですから、この福音の内容を信じて「主イエスを仰ぎ見る」のです。この「仰ぎ見る」というのは、頭の仕事ではなくて、身体の仕事です。肉体の行動です。(仰ぎ見る姿勢を示しつつ) こうすることです。十字架にかけられた主イエスも、復活された主イエスも、我々の眼には見えませんが、こういう姿勢で仰ぎ見る。内村鑑三は、キリスト教は「仰ぎ見る宗教だ」と言われました。先生の口マ書第 1 講では、「十字架の主を仰ぎ見て義とせられ、復活の主を仰ぎ見て潔められ、再臨されるキリストを仰ぎ見て栄化する。キリスト教とは徹頭徹尾仰ぎ見る宗教である」と言われました。ところが、内村先生の弟子で仰ぎ見ている人は少ないように思う。師の言に従わない者は、弟子ではありません。

## 主の御名をとなえる方法

もう一つの方法は、ロマ書 10 章 1 - 13 節で指摘されている方法、すなわち、「心に信じて、口で主の御名を称える」という方法です。この箇所は、キリスト教の歴史において、これまで大きな問題とはなっておりません。しかし、このロマ書 10 章 1 - 13 節は、私は大胆に預言しますが、日本および人類のキリスト教の歴史において、この箇所を問題とする日が必ずやってくる。これは、私が言うのではありません、恵心僧都がそう言っておられる。

私の実家と養家が浄土宗の信者でありましたから、私は幸いにして浄土門の教えに接することができました。その浄土門の信心の眼を以って、ロマ書を熟読玩味すれば、このロマ書 10 章 1 - 13 節がロマ書の中心としてクローズアップしてくる。表に出てきます。...私は、キリスト教の歴史において、このロマ書 9 章から 11 章まで、特に 10 章が必ず重大な問題となると、確信を持って預言致します。

ヨハネ伝では、「信じて仰ぎ見る」という方法ですけれども、ロマ書は「信じて主の名を称える」という方法です。あの疑い深いトマスが、最後には「わが主よ、わが神よ」と言った、あの口で「わが主イエスよ」と唱える方法です。「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」というこのロマ書 10 章 13 節の言葉は、人類とキリスト教の歴史において、恵心僧都を通して、明らかにされる時がきつときます。私はそう信じます。恵心僧都がもしロマ書を見られたならば、このロマ書 10 章 11 - 13 節を指して、これはわが文句なりと言われるに違いない。

あのマルティン・ルターの宗教改革が 1 章 16 , 17 節の言葉によって興ったように、また、オーガスチンがロマ書 13 章の最後の箇所、あの「再臨の日は近し...」の言葉を持ってローマンカトリックを興したように、そのようにはまだこのロマ書 10 章 13 節は問題にされておられません。私は、これは誠に残念に思います。これを明らかにするのは、東洋人の責任であります。...



#### (4) 個人および人類の歴史に及ぼした影響

これについては、私が申し上げるまでもなく、諸君がよく知っております。オーガスチンをもってローマンカトリックが起こり、ルッターをもって新教が興り、ウエスレーをもって大メソジストが興りましたが、この3人の名を挙げただけでも、パウロのこのロマ書がいかに人類に深く大きな感化を及ぼしたかが、一目瞭然であります。1900年かかって、我々人類は、未だパウロのこのロマ書を読みこなしていない。残されています。私の知るところでは、少なくとも1箇所は残されています。それは、本日司会者に読んでいただいたロマ書10章9, 10, 13節です。

この箇所の真理は、まだ人類の経験において問題とされていない。私は、内村先生にならいながら、無教会と言わずに、ここで唱えるキリスト教を「恵心流キリスト教」と称しています。これは、恵心僧都がもしこのロマ書を研究されたならば、きっとこのロマ書10章を問題にされたに違いないと思うからであります。...

この「主の名を呼ぶ」ということ、「救い主の名を呼ぶ」ということの深い意義は、東洋において研究されてきました。法華經二十五品の觀音經において、また、浄土門では、阿彌陀經においては、この「救い主の名を呼ぶ」ということが中心となっています。これについては、2000年の間に、東洋人によってすでに研究済みであります。

## キリスト教の基礎は「福音」

キリスト教の基礎は「福音」にあります。何事でも基礎が大事です。私は、テレビで相撲を見るのが好きですが、豊山と言う大関が昨年

引退することになりました。この豊山という大関は身体も大きいし、力も強いし、要するに相撲が強い。ところが、大事な一番になると負けるのです。丁度、将棋の大山名人が観戦しておられたときのことで、アナウンサーが大山名人に、「豊山は大事な一番によく負けるのは、どういうわけでしょう」と聞きました。名人は、「当たっているかどうか分からないが、私はどうも豊山は基礎がないんじゃないかと思います」と言われた。あの豊山と言う人は、学生相撲の出身です。学生相撲ですから、10代からの本当のプロの厳しい修練は受けていないでしょう。よくは分かりませんが、私は、大山名人の言葉は当たっているのだろうと思う。これは相撲に限らない。何事でも基礎が大事です。何事でも基礎がなかったら、何十年やっても、ぐらぐらしています。

キリスト教の基礎は「福音」にあります。そして、この福音を最も明瞭に説明したのがロマ書です。ですから、このロマ書を本当に勉強することが、いかに大切であるかが分かる。ルッターは、彼のロマ書注解の序文において、「このロマ書は、福音を最も明瞭に説明している書であって、これをいくら学んでも学び過ぎるということはなく、いくら考えても考え過ぎるということはない。一字一句を覚えたらよい」と言いました。私は、福音はロマ書にあり、そして「このロマ書を最も簡単明瞭に説明したのが10章1-13節なり」と確信する。

## 毎日やるかやらないかによってきまる

福音は、その性質からして外国語です。外国語を勉強するには、少なくとも毎日 10 年間は続ける必要がある。しっかり聴いておいて下さい。日曜日にふらっと教会へ出て来て、説教を聴いても、家に帰ってから 1 週間自分のことばかりやっているようなことでは、駄目です。そして、日曜日に聴く説教にしても、福音を聴かずに、牧師の神学あるいはキリスト教の倫理、道徳の話聴いているようなことでは、50 年、70 年やっても無駄です。福音は分かりません！また、福音を説くことのできる先生の所へ行っただとしても、日曜だけ説教を聴いて、後の 1 週間は自分のことばかりやっているようでは、何十年やっても駄目です。キリスト教をやめた方がよい。

玉川（直重）先生のギリシア語の独習書を読みましたら、「ギリシア語というものは、毎日やるかやらないかで決まる。その多寡、遅速は問題ではない。読めるようになるかならないかは、毎日やるかやらないかによってきまる」と書いてありました。これは、ギリシア語に限りません。外国語とは皆そういうものです。毎日やるかやらないかによって決まる。英語でもそうでしょう。10 年間、毎日やらないと駄目です。5 年や 6 年ではものになりません。義務教育でも 9 年ばかりです。いわんや、永遠不滅の生命を頂くという人類の理想を自分のものにするには、10 年は易い。諸君！福音が分かりたければ、毎日やりたまえ。教会へ来る必要はありません。1 日の多寡、遅速は問題ではない。最初は 1 分間でもよろしい。毎朝起きた時と毎夜寝るとき、「神よ、どうぞ永遠不滅の生命を教えてください。福音を教えてください」と祈りたまえ。これを 10 年間続けたまえ。それだけの熱心と決心がないのであれば、キリスト教をやめたまえ！

10 年間、毎日、「神よ、永遠の生命を教えてください」と祈る。これが、最低の線です。この線は譲れません。私は今年で 72 歳になりますが、この説はもう変わりません。